

善隣

No.557 通巻824

2025年（令和7年）3月1日発行（毎月1日発行）

2025

3



一般社団法人 国際善隣協会

新年互礼会

2025年1月9日（木）会館5階にて



雅楽師・四天王寺39代当主、高谷秀司氏
による琴の弾き語りは拍手喝采をあびる。



井出亜夫会長の挨拶



善 隣 目 次 2025年 3 月号

公開講演会記録

魯迅のデスマスクを採った日本人歯科医の謎を解く
—奥田杏花の人物像を明らかにし、併せて高橋徹志に及ぶ…長堀祐造 2

みんなの知らないインド
—日本と繋がる文化・歴史・政治・経済 ……久保木一政 11

ボルゲーゼ美術館に見るギリシア神話世界 ……塚本 博 21

陶々俳壇 ……馬場由紀子 29

中国ウォッチング ……編・訳 上松玲子 30

協会通信・会員だより・同好会だより …… 32

2025年3月の行事予定 …… 33

みんなの写真館 …… 32
(姜晋如、編集部)

善 隣 第557号 通巻824号
2025(令和7)年3月1日発行
発行所 〒105-0004 東京都港区新橋1-5-5
一般社団法人 国際善隣協会
TEL 03(3573)3051
FAX 03(3573)1783
発行人 井出亜夫
編集人 朝浩之
編集協力 山谷悦子
印刷所 (有)ゆにおんプレス
TEL 048-834-1201
定価 一部400円 年額4,800円
振替 00120-0-145956
国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345
©禁無断転載

当協会は、中国ならびに近隣諸国
との相互理解を深め、友好親善・交
流を推進しています。
一般社団法人 国際善隣協会

公開講演会記録

魯迅のデスマスクを採った日本人
歯科医の謎を解く

——奥田杏花の人物像を明らかにし、
併せて高橋徹志に及ぶ

慶應義塾大学名誉教授 長堀祐造



はじめに

講演時のサブタイトル「荒唐無稽さ」云々は少し大げさで恐縮です。「ひょっこりひょうたん島」以来の井上ひさしファンとしては大江健三郎氏とともに魯迅の愛読者、応援団であった井上さんを非難するつもりは毛頭ありません。本日はあくまでこの芝居の主要登場人物、魯迅のデスマスクを採った歯科医・奥田杏花の人物設定が完全な虚構であることを魯迅研究の立場から示しておくということに尽きます。

また、新たにわかったもう一人の上海の歯科医で最晩年の魯迅の歯を診ていた高橋徹志についても予定外ですがお話しします。この二人の人物像は、魯迅死去から90年近い今日まで不明でした。昨年来、奥田、高橋両歯科医師それぞれの息子を探し当て、インタビューにこぎ着けて、魯迅研究史の空白を些か埋められましたのでここに紹介する次第です。

1. 奥田杏花調査に至る過程

1936年10月19日払暁、魯迅が上

海施高塔路スコットの自宅で息を引き取ると、上海内山書店店主の内山完造は近所の歯科医で内山書店の「漫談会」の常連、奥田杏花（本名・愛三）にデスマスクの採取を依頼します。このデスマスクは今、上海魯迅纪念馆に保存され、魯迅の髭や眉毛が貼り付いて残っています（写真1）。奥田はまた魯迅死去直後の『週刊朝日』11月8日号に「死ぬ二日前の魯迅さん―衝突があり相ですね」という文章を寄稿しています。魯迅の健康状態や日中問題に関する魯迅の悲観的認識、「内山書店漫談会」の

様子や歯科医らしく魯迅の入れ歯の状態についても書いています。ここからも魯迅と奥田の親交は明白なのですが他に奥田を知る資料はありませんでした。奥田の名前は『魯迅日記』にはなぜか登場せず、内山ら魯迅周辺の日本人の回想録にも詳しい人物紹介はありません。

この奥田に広く光を当てたのが井上ひさしです。1991年、魯迅夫妻、内山完造夫妻それに魯迅の主治医の日本人医師、須藤五百三と当の奥田愛三の6人の登場人物で『シャンハイムーン』を書き上演しました。私も初演を面白く見たのですが、奥田の人物設定があまりにリアルなのに驚きました。藤井省三、瀬戸宏といった中国文学・演劇の専門家はすぐに時代背景や人物設定に問題ありと劇評に書きました。

余談ですが藤井さんには、劇評を読んだ井上から「いい加減なことばかり書いて申し訳ない、批判してくれたのは藤井さんだけだ」といった主旨の書信が届いたと、私は当時、藤井さんから聞きました。

私も奇妙に感じ、魯迅の病气や受診医師の研究で有名な医師で医学史家の泉彪之助先生（2018年没）に書信で奥田のことを尋ねました。泉先生は『シャンハイムーン』初演前から、『週刊朝日』復刻版担当編集者の畠堀操八氏と奥田の調査を進めており、奥田愛三未亡人シズさんが長崎に健在ということをつきとめ、すでに連絡を取っていました。

シズさんは泉先生宛書信で、自身の上海行以前に魯迅は没していました。奥田は上海在住20年、魯迅とは10年来の付き合いで週2回は雑談しておりデスマスクも採ったこと、また愛三は明治26（1893）年11月30日生まれだと証言しています（シズさんは2005年没）。さて、今回の調査に威力を発揮したのは泉先生ご教示の二書でした。『日

本歯科医師名簿』1935年版（日本歯科新聞社）「中華民国の部」には「上海、施高塔路一 奥田愛三」とあり、その右隣には「上海 北四川路1095 高橋徹志 同 竹中昭二」と載っています。後者はあとで触れる高橋徹志とその弟、竹中昭二のことです。

もう一書『日本歯科医籍録』3版（医学公論社、1955年）には「奥田愛三／現住所：長崎市東浜町／本籍：京都府／生年：明治二六年十一月二十日／学歴：大正十五年東歯校卒／経歴：東京救世軍病院歯科部創設。上海市に開業。昭和二二（年）帰国。／趣味：釣魚」とあります。

泉先生は当時、この資料に拠り奥田が東京歯科医学校出身で救世軍病院歯科部の創設者であることを明らかにする文章を発表し、米留学経験者で母親が中国人などという井上の奥田像は完全な虚構だとしていました。しかし、泉先生たちの調査はここで終わり、爾来三十余年、私は昨年やっと秋吉收九州大学教授の協力を得てこの課題に取りかかりました。



写真1 魯迅のデスマスク（上海魯迅紀念館蔵。『周氏兄弟研究』特刊シリーズIより）



写真2 若き日の奥田杏花 (国会図書館蔵『基督に刃向ふ者』口絵)

2. 奥田杏花資料の発見

私たちは魯迅関連記事を求めて奥田が戦後、随筆を連載していた『長崎新聞』を調べ始めたのですが膨大な作業量に中止を決断、国会図書館のデジタル資料に当たったところ、新発見に恵まれました。まず奥田の小説集『基督に刃向ふ者』です。著者署名入りで寄贈されており、1932年1月20日、上海発行、著者兼発行者は本人で、自費出版と推測されます。若き奥田の写真が口絵にありました。初めて見る奥田の写真でした(写真2)。次いで秋吉教授が3篇の文章を発見します。

『日本歯科医学会雑誌』(1965年11号)「長崎の魚と催し 有明『むつ五郎』の由来」で奥田は「私と魯迅とは永年親しくしていたので、彼が死去した日丁寧にデスマスクを採り、宋

婦人(魯迅夫人・許広平、別名景宋)に謹呈した」と書いています。奥田自身がデスマスク制作について書き残した唯一の文章です。

続いて「暗に葬られた 上海丸の最後」(『長崎日日新聞』1957年6月19日)。1943年10月30日未明、上海・長崎を結ぶ定期船、崎戸丸と衝突して沈没し、戦時中は敵の潜水艦攻撃によるものと発表されてきた事件について、この船に乗り合わせた奥田は現場の状況を目撃し、臨場感溢れる筆致で描いてみせています。

さらにミニコミ誌『長崎手帖』(1958年10月)に書いた「白萩」という短文です。上海時代の夏の長崎避暑の思い出や引揚げ直後のインフレ、食糧難、そして気晴らしの釣りの話など軽やかながら、深い省察を感じさせる文章です。

最後は歯科医開業試験合格直後の奥田が労働者のために東京下谷の救世軍病院に歯科部を創設するという1917年12月30日付『読売新聞』の記事で

す。病院長曰く「担任する医師は奥田愛三と云ふ歯科医で大そう自分が苦学した経験から下層労働者に同情し種々特殊の便宜をして下さる筈です」と。

3. 第一次長崎探訪から奥田杏花子息・昇氏夫妻インタビュー

2023年6月、文献調査を踏まえ秋吉教授は長崎県長与町の奥田愛三・シズ夫妻旧居地番を訪れましたが、そこにはアパートが建ち夫妻の旧居は跡形もありません。諦めて帰ろうとすると隣家のインターホンが見え、押してみると出てきた方がなんとシズ夫人の甥御さんでした。このお宅はシズ夫人の実家だったのです。そして、いとこに当たる奥田夫妻の子息、奥田昇氏をご紹介いただき私と秋吉氏は翌7月に福岡県糸島市の奥田昇氏宅を訪ねました。

奥田昇氏は1943年生まれ、現在81歳、東京での勤務を経て糸島市の泰子夫人の実家近くに移り住み、今も現役の行政書士として活躍中です。夫人を交えてのインタビューでわかった愛

三のことを次に紹介します(順不同、主語の愛三は省略)。

(1) 本籍地は京都府熊野郡久美浜町(現京丹後市)、生家は元造り酒屋。江戸時代の飢饉時に、米を村人にお粥にして提供してしまい、愛三生誕時は酒作りは廃業していた。医者を多く輩出した家系で、親戚筋には国会議員や閣僚、財界人もいる。

(2) 上海で歯科医をしたあと、海運業にも従事、戦中は軍医として従軍、ジャワで現地の人々の診療にも当たり、終戦を迎えた。

(3) 2度結婚し、初婚で二男・一女(全員故人)、シズ夫人との再婚で昇氏をはじめとする二男・一女を得る(写真3)。みな福岡市と糸島市に健在であ

る。シズ夫人は東京で菊池寛の近所に住み、文人たちとも交流があったらしい。上海で愛三と結婚後、戦争末期、郷里長崎に昇氏ら子どもを連れて引揚げたが、昇氏はそこで被爆し九死に一生を得た。

(4) 1946年、長崎に引揚げ歯科医院を開業。医院は当初、長崎市浜町はまのまちに、その後、新町(現興善町)に移転した。

(5) お金のない患者からは治療費を取らず、医師は人命を救う神聖な仕事と考え、孫たちが医師になることを願った。

(6) 趣味人・文人で釣りを愛し、戦後は随筆を長崎新聞に連載。また、若い頃は俳優になれと周囲から進められるほどの美男子であった。

(7) 魯迅の歯を診たこと、デスマスクも採ったこと、内山完造と親しかったことを昇氏に話していた。

(8) 魯迅のデスマスクを愛三は日本に持ち帰っていたと昇氏は確信しているが、上海時代のものを保管していた蔵は1950年代半ばに

火事となり、すべて消失してしまった。(9) 小腸癌で、1979年2月22日に逝去。墓は長崎市寺町の皓台寺にある。

4. 第二次長崎探訪 奥田愛三の墓所と歯科医院跡を求めて

昨年9月初め、私たちは奥田愛三の足跡を求めて長崎の街を探訪しました。最初に向かった愛三の墓所、皓台寺は長崎市寺町の曹洞宗の名刹で、高島秋帆やシーボルトの娘・楠本イネの墓もあります。奥田家の墓石裏面には「昭和五十三年十二月 奥田愛三 建立」とあり、愛三の逝去2か月ほど前に建てられたことがわかります。

次いで、奥田歯科医院旧所在地2か所を確認しました。昇氏によれば、昭和25(1950)年に歯科医院を開業し場所は、長崎市浜町商店街にあったタテノ洋品店の2階か3階かで、その後、昭和35(1960)年前後に長崎市新町の朝日新聞長崎総局の斜向かいに移転し、引退までここで開業したということでした。

昔の浜町商店街地図と照合しながら



写真3 晩年の奥田愛三夫妻(1970年代。奥田昇氏提供)

現在の浜町アーケード街を実際に歩いてみると、今、ドラッグストア・マツモトキヨシから西隣の建物、tutuannaのある辺りまでがタテノ洋品店跡地ということになります。その後、歯科医院は近所の長崎市新町に移転しました。昇氏からは「朝日新聞の斜向かい、測量事務所の正面」と聞いていましたが測量事務所はすでになく、付近の創業78年という井上印房の老婦人にお尋ねすると、奥田歯科医院旧所在地が難なく判明しました。今は1階に長崎焼鳥の店が入る7階建ビルになっています。

魯迅は父親の遺伝で生涯、歯痛に悩まされましたが1902年3月末、日本留学への船旅の途次、長崎に寄港した際、歯医者で「歯石」を取ってもらって感激しています。その長崎で奥田が開業したのは奇縁と言っほありません。

5. 再び『シャンハイムーン』 GIJN

庫です。愛三の年齢は39歳、米国留学帰りでパッカードを乗り回す些か軽薄な遊び人という設定で、さらに母親は中国人で愛三は上海から引揚げ後、鎌倉の歯科医院の婿養子となって歯科医を続けたことになっています。こうした愛三の人物像と今回の調査で判明した実際の愛三の経歴を比較し、その虚構性を確認しておきます（文献注省略）。

まず、昇氏提供の戸籍情報によれば愛三の両親は奥田得一・は津夫妻、愛三はその三男で誕生日はシズ夫人の証言通り明治26年11月30日です（歯科医師名簿は11月20日）。母親は日本人、また官報その他から愛三は米国留学ではなく、東京歯科医学専門学校の別科、東京歯科医学校出身でした。東京下谷の救世軍病院に歯科部を創設後、一時、兵庫県八鹿町で開業、1925年上海に渡り開業、1927年に上海に移り住んだ魯迅と親交を結び、大戦末期は軍医としてジャワに従軍、戦後1946年に長崎に引揚げて開業しています。上海でパッカードに乗っていたこともまずありません。

最後に愛三の子どもたちを襲った戦争の悲劇について一言。長女・新子は米軍の機銃掃射事件「いのはなトンネル銃撃事件」（終戦直前、今の八王子市で発生）で死亡。同事件の「慰霊の会」（八王子市）に私たちの調査報告を送り、総務省のホームページ上の慰霊碑に、奥田新子さんの名前がないことを伝えたところ、「慰霊の会」は戦後80年の区切りに慰霊碑に新子さんの名を刻む方向だと連絡を受けました。三男・昇氏は長崎で被爆して九死に一生を得ました。昇氏がインタビューで、同級生たちが次々と亡くなっていく様や、お子さんの生まれるときのストレスの凄まじさを語る言葉には、強い衝撃を受けたことも忘れられません。映画『母と暮せば』（山田洋次監督、2015年）を構想していた井上さんが、生前この話を知ったら間違いなくもう一つの『シャンハイムーン』を書いたでしょう。

『シャンハイムーン』、この魯迅研究者に対する挑発がなければ私も奥田杏花を調べることはなかったでしょうから、これは井上さんの「功績」で感謝

しなければなりません。

6. 魯迅晩年のかかりつけ歯科 医 上海歯科医院の高橋徹志

予定外ですが、晩年の魯迅一家かかりつけだった上海歯科医院の高橋徹志歯科医師について紹介します。魯迅との縁は深いのですが人物像は不明でした。つい最近の新発見も含め調査結果をお話しします。

1927年10月に上海に居を構えた魯迅は当初「密勒路の佐藤歯科」や「宇都歯科医院」で受診します。両歯科医師のことは未詳ですが前者は佐藤吉郎と思われる。1930年2月28日、魯迅は日記に「蘊如〔魯迅三弟の妻〕および広平〔妻〕とともに歯科医院に行き治療」と記し、1932年4月に「前園〔立衛〕歯科」に数回受診したのを例外に逝去までの6年間、一族でずっと上海歯科医院で受診しています。魯迅は親族のために高橋医師との間で日本語通訳も務めています。

『魯迅日記』には高橋徹志や上海歯科医院を指す言葉が頻繁に現れます。

1930年2月28日からの約6年間で46回登場します。1930年には30回、その後1935年まで毎年数回、計46回です。須藤五百三に次ぐ回数だろうと思います。このうち、6〜7回は受診記録ではなく私的交流の記録です。1930年の6、7月に、徹志は4度、魯迅宅を訪問しており、6月21日の最初の訪問では、英訳版『阿Q正伝』を贈られています。さらに目を引くのは7月12日に夫人同伴で訪問していることです。魯迅は通常、内山完造宅を接見場所として使用しており、自宅を4度訪問した徹志は日本人としては異例です。また夫人同伴で魯迅宅を訪問した日本人も内山書店関係者を除けば他にいません。魯迅宅を訪問した日本人女性も作家の林芙美子と魯迅お気に入り

前でも触れた1935年版『日本歯科医師名簿』には「上海北四川路1095 高橋徹志」とありましたが、1955年版『日本歯科医籍録』にも「高橋徹志」が岐阜県大垣市の部に出ています。住所は「大垣市藤江町」で「中央繊維大垣工場診療所」に勤務しています。同姓同名、1900年という生年、1925年の歯科医師登録などからこれは上海歯科医院の高橋徹志と同一人と断定できます。同名簿1968年版では高橋徹志の項は住所が「大垣市荒尾町東」、中央繊維工場診療所勤務は過去の略歴欄に移り現職は「高橋歯科医院 1956年5月開業」となっています。徹志の左隣の欄には高橋五郎という名が見え、住所は「大垣市赤坂町」ですが「中央繊維診療所歯科担当の傍ら」、同じ名称の高橋歯科医院を1949年開業とあります。徹志と同じ日本歯科医専卒、中央繊維診療所勤務、同名の高橋歯科医院を開業ということから、徹志、五郎両氏には親族関係が強く推察されました。

こうして追跡が始まり、大垣市の歯

7. 高橋徹志の発見

科医院を調べると高橋五郎の住所、大垣市赤坂町に今も高橋歯科医院があります。そこで2024年春院長の高橋敏氏に手紙を書き、魯迅の歯を診ていた高橋徹志とは親戚でしょうかとお尋ねしました。その結果、電話をいただき、徹志は敏氏の父・五郎の兄で自分からは伯父に当たること、徹志の子息・一吉氏は歯科医にはならず、県庁を定年退職し、近所に住んでいるとのこと、連絡先を教えてくださいました。

こうして徹志子息・一吉氏、甥・敏氏とメール、電話、手紙でやりとりをし、この「2024年」9月下旬に大垣市で両氏にインタビューし、徹志の出身地である隣町の池田町善性寺にある徹志・五郎ご兄弟のお墓を訪れました。以下、お二人からの提供情報と私の文献調査から高橋徹志の人物像を紹介します。

高橋徹志は1900（明治33）年12月7日、岐阜県揖斐郡池田町の医師、高橋慶太郎の五男一女の次男に生まれました。三男は医師、次男、四男、五男の3人が歯科医になったという医師の



写真4 晩年の高橋徹志
(高橋一吉氏提供)

家系です。徹志は実家から近い旧制大垣中学（現大垣北高校）卒、そして日本歯科医学専門学校（現日本歯科大学）を1925年に卒業、同年10月に今の丸ノ内線新中野駅付近の青梅街道沿いで高橋歯科医院を開業します。1926年の『日本医籍録』2版では徹志の趣味は「読書」とあります（写真4）。

8. 上海歯科医院の開業・高橋徹志・淳三・昭二、三兄弟の発見

中野での開業から数年、徹志は上海に渡って北四川路デイクスウエルアパート2階で上海歯科医院を開業します。開業時期は、歴史的建築物として現存するこの建物の竣工が1929年であり、1930年2月28日の『魯迅日記』に同医院が登場することから1929

年半ばから1930年初頃と推定されます。

さて新発見が続きます。『魯迅日記』1933年10月23日に拠ると、魯迅は旧友の息子が福民医院に入院して回復したお礼に病院関係者を招宴します。日本人経営の福民医院に魯迅は一族郎党で世話になったおり、息子海嬰もここで難産の末、生まれたのでした。実はこの宴会に二人の高橋が出席しており、『魯迅全集』注は福民医院レントゲン技師高橋淳三と上海歯科医院の高橋徹志とだけ記すだけなのですが、今回、一吉氏と敏氏のお話から高橋淳三が徹志の兄だとわかりました。福民医院関係者でない徹志が招宴された謎も氷解します。

さらに重要なのは、魯迅は1936年5月31日、米国人記者、アグネス・スメドレーの紹介で米国人医師、トマス・ダンの診察を受け、重症であると告げられ、翌6月15日頃、福民医院で胸部X線写真が撮られます。この写真からも重症と判明しますが、当時の福民医院放射線室長は高橋淳三でした。

この胸部X線写真は現在上海魯迅纪念馆に保存されており、魯迅の病状と直接の死因を証明する唯一の証拠として極めて重要なものです。魯迅と高橋兄弟の関係から考えてこの写真が淳三自身の手で撮影されたことは間違いありません。

実は魯迅の死因が主治医の元日本軍軍医、須藤五百三による謀殺だという説が魯迅の家族周辺から出ていたのですが、1984年に中国の権威ある医師たちによってこのX線写真の読影会があり、魯迅の死因は結核の合併症としての気胸が直接の原因ということに決着します。中国の魯迅研究者の多くもこの説を採るのですが、魯迅の息子、周海嬰は2001年の自著で再び問題を蒸し返しました。これには中国国内でも批判が出て良識が示されましたが、日中関係が悪化するたびに謀殺説が出てくるのは残念なことです。こうした偏見は須藤医師を主治医とした魯迅の選択、見識を侮辱するものだと私には思えます。現在の主流の研究は須藤の治療は当時の標準治療の範囲内と見て

います。

さて、一つ見落としがありました。前述の上海の日本人歯科医師名簿に高橋徹志と同じディクスウエルアパートで開業している竹中昭二の名前がありました。迂闊にも調査対象に入れてなかったのですが、ある資料になぜかこの竹中昭二が上海の淳三宅に逗留したと出てきました。大垣で一吉氏から、高橋5兄弟のうち、3人が歯科医師で、四男、四郎は別名・昭二だと聞いたのをふと思いつきました。そして官報や歯科医名簿から、竹中昭二と高橋昭二の歯科医師登録番号が同じであることがわかりました。つまり同一人物なのです（後日、一吉氏から昭二氏が一時竹中姓だったことを確認する証言をいただきました）。高橋徹志はある時期、弟・昭二と一緒に上海歯科医院で診療していたわけです。魯迅一族はこの弟さんにも受診していた可能性があり

ます。こうして高橋三兄弟は上海でろって病院のX線技師、歯科医として魯迅一族の医療に寄与していたのです（写真5）。

9. 戦後の高橋徹志

高橋徹志は戦後、上海から東京に引揚げ、一吉氏によれば愛知県一宮市^{せき}起で短期間開業した後、中央繊維大垣工場診療所勤務の傍ら大垣市で開業しました。徹志は魯迅の歯の治療をしたこと、英訳の『阿Q正伝』を魯迅の署名入りでもらったこと、それを引揚げの際、上海に置いてきてしまったことを一吉氏に話していました。



写真5 1936～1937年にディクスウエルアパートで撮影された高橋三兄弟一族。後列右から、淳三、徹志、昭二。前列右から、徹志夫人シゲ、淳三娘、三兄弟の母、淳三息子、淳三夫人。（高橋一吉氏提供）

私生活の面では引揚げ後、魯迅宅に同伴したシゲ夫人とは離婚し、一灯園という京都の懺悔奉仕団体で「修行生活」を経験しますが、これは裕福な上海での暮らしをすべて失った虚無感が原因だろうと弟の五郎は推測していたと敏氏は話します。その後再婚し、徹志52

歳のときに長男一吉氏が生まれ、息子の成長を見届けるべく80歳近くまで歯科医を続けたということです。話が面白く、人を引きつける天性の魅力を備えていた徹志は、女性にもて、そういうお茶目で、人なつっこい性格のため、魯迅に気に入られたのではないかと一吉、敏両氏はお考えです。また徹志は何よりも正直な人であったとのこと。前述の趣味は「読書」とあることから、徹志は文学談義で魯迅の眼鏡にかなったと私は想像したのですが、お二人は「それはありえない」と大笑いされました。

高橋徹志は1987年12月15日、膵臓癌のため、満87歳で亡くなります。今は故郷池田町の善性寺に眠っています。



写真6 高橋徹志氏の墓（筆者撮影）

す（五郎氏の墓もこの寺にあります）。戒名は「月光院積浄心」。「月光院」の3字は徹志自身がつけたとのこと。魯迅が好きなものは正直者と月夜だと須藤五百三が書いていますが、まさに「正直者」だった高橋徹志は魯迅の言葉を知ってか知らずか、自分の戒名に「月光」を入れたのでした。高橋淳三技師は1975年10月16日、行年78歳で他界し、善性寺近くの霊園に眠っています。昔のレントゲン技師の宿命と言ふべきか、後年は右腕を切断されたとのこと。末弟昭二は1979年2月に亡くなっています（写真6）。細かい話になりましたが、調査の過程も一緒にお楽しみいただけたなら幸いです。『魯迅全集』の次の版が出る

ときには奥田杏花、高橋三兄弟の注がわずかなりとも充実したものになることを願ってやみません。当日、90分という長時間の講演機会をくださった国際善隣協会に感謝いたします。

付記：本講演は2024年10月26〜27日開催の「魯迅仙台留学百二十周年記念国際シンポジウム」（東北大学）に提出した講演原稿「魯迅と二人の上海在留日本人歯科医：奥田杏花と高橋徹志」および長堀・秋吉收「魯迅のデスマスクを取った歯科医・奥田杏花（愛三）の人物像」（『周氏兄弟研究』特刊シリーズ1、2024年7月）に基づくものです。

（2024年11月15日・21世紀アジア塾）

筆者略歴（ながほり・ゆうぞう）

1955年埼玉県生。東京大学文学部卒、高校教員を経て早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。桜美林大学助教授を経て、慶應義塾大学教授、現在同大名誉教授。専攻は魯迅を中心とする中国近現代文学及び中国トロッキー派史。博士（文学）。

公開講演会記録

みんなの知らないインド

——日本と繋がる文化・歴史・政治・経済

(有) インド総合研究所 久保木一政



はじめに

日本とインドは「日印特別戦略的グローバル・パートナーシップ(GPS)」なる最重要の2国間関係を結んでいる。「特別戦略的」という最上級の形容詞がついたGPSはインドだけである。インドは日本にとって、極めて重要な国であり、世界中でトップクラスの親日国である。インドは1947年の独立から100年後の2047年までに先進国入りを目指して邁進中である。経済面では、インドは1991年にそれまでの社会主義経済から市場経済

に移行した。中国に後れること10年である。1980年代後半、ラジーヴ・

ガンディー首相率いる国民会議派政権は規制緩和を行ったが、経常収支が悪化し、折からの湾岸戦争で原油が高騰したことから、インドの国際収支は大きく悪化し、債務のデフォルト寸前まで追い詰められた。日本は緊急融資をしてインドを救った。

高齢化し、人口の減少に直面する日本は、ベトナム、中国、インドをはじめとする諸外国からの高度IT技術者、特定技能外国人を必要としている。外国人材を受け入れる日本と外国人は互いの文化、歴史、各国の事情を知る

ことで、双方の協力体制がうまくいくのである。

仏教伝来、大仏開眼、インド独立に関わる日本の支援、日本の高度経済成長を助けたインド産鉄鉱石、日本の政府開発援助(ODA)によるインドのプロジェクト援助などについてまとめた。これにより、日印両国の人々が一層お互いに日印交流の歴史理解を深めて交流していくことを期待するものである。

1. インド文化の渡来

前近代の日本とインドの関係

日本人は仏教を通じてインドを知っ

た。仏教伝来は、6世紀(538年)。釈迦が没してから1000年、大乘仏教が始まって500年。当初は朝鮮を通じ、ついで中国から伝わる。したがって、日本は隋・唐時代に発展した中国独自の仏教の影響を受け、日本伝来後も独自の展開を遂げた。

聖徳太子の十七条憲法第一条「和を以て貴しと為す」(604年)。「話し合いを大切にして、いさかきをおこさぬように」と筆者は解釈している。院政期、鎌倉時代以降、多様な宗派が誕生、発展した。インドに渡った中国僧は、玄奘、法顕、義浄がいるが、日本僧はいない。インドからは、菩提僊那(ぼだいせんな)が日本に渡り、東大寺盧舎那仏開眼供養で、導師を務めた(752年)。

日本に渡ったインドの神様

仏教とともに日本に渡ったヒンドウ教の神様が大勢いる。弁財(才)天(サラスヴァティ)、帝釈天(インドラ)、毘沙門天(クベラ)、吉祥天(ラクシュミー)、大黒天(マハーカールシヴァ)、

金毘羅(クンビーラ)、聖天(ガネーシヤ)、韋駄天(スカンダ)、水天(ヴァルナ神)、閻魔(ヤマ)、迦楼羅(ガルーダ)などなど。

弁財天(サラスヴァティ)、は、インドでは学問・音楽の神様であるが、日本では商売繁盛の神様となっている。手に弦楽器(ヴィーナ→琵琶)を持っている。大黒天も七福神の一つで、大国主命と合体されている。

日本語になったインドの言葉

旦那、世話、莫迦(馬鹿)、摩訶(不思議)、のるかそるか、仏教用語(卒塔婆、舍利、祇園、沙羅双樹、三昧、達磨)など多数ある。

「のるかそるか」は、「地獄(ナラカ)天国(スワルガ)」の意。「そるか」はるか昔、インドネシアから島伝いに日本の三保の松原



写真1-1 京都八坂神社・祇園祭

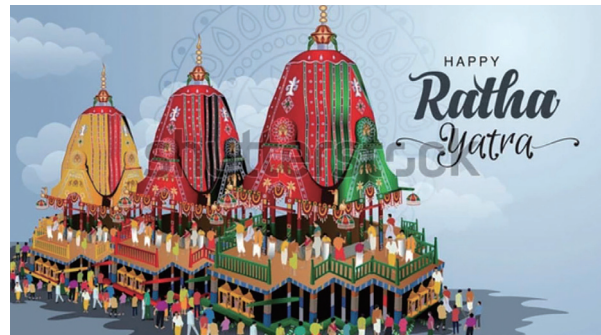


写真1-2 山車巡行(ラタ・ヤートラ)

インドから日本に渡来した? 文化・祭



写真2-2 インド ケララ州の伝統舞踊カタカリ



写真2-1 歌舞伎の隈取

に到着し、富士山の絶景を見て、インドネシア語で「ソルカ」と絶句し、駿河（スルガ）の語源になったとの逸話が残っている。

日本語の五十音図の起源

インド古典語サンスクリット語を起源としている。石川県加賀市山代温泉の温泉寺には、寛治7年（1093年）に住職明覚が書いた『反音作法』の中に現存する最古の五十音図が表されている。

2. スバス・チャンドラ・ボースのインド独立の闘争と日本の支援

ネタジ・スバス・チャンドラ・ボースの独立闘争

ここまでは、インドの文化・宗教が日本に大きな影響を与えたことを概観したが、近年に入り日本がインドに貢献する機会が訪れた。日本はインドに独立闘争の支援を要望されたのである。日本が「インパール作戦」を通じて、

ネタジ・スバス・チャンドラ・ボースの独立闘争を支援したことで、インドの独立が早まったのである。以下にその概要を述べる。

1904年に勃発した日露戦争での日本の勝利は、他のアジア諸国と同様にインドの独立志士たちを鼓舞した。この頃来日したインド人としては、プラン・シン、ヘランボ・ラル・グプトゥ、ラス・ビハリ・ボース（中村屋のボース）、A・M・ナイル、アナンド・モハン・サハエ、そしてネタジ・スバス・チャンドラ・ボース（ネタジはヒンディー語で指導者の意味の尊称）と続く。

ボースは1897年オリッサ（現オデイシャ）州カタック生まれ。ケンブリッジ大学に留学、インド高等文官（I A S）の試験に合格するも、役人の道は選ばず、ガンディーの独立運動に身を投ずる。その後、インド国民会議派で主要な活動家となるが、ガンディーの非暴力の方針と合わず、会議派議長を辞任。1939年第2次世界大戦が始まると、反英の大衆運動を開始したため、逮捕され、その後自宅軟禁となった。

英国の敵と手を結び、その援助でインドの独立を達成するため、1941年自宅前の監視の目を盗み、インドを脱出、ドイツに渡り、ヒトラーを頼りに世界に向けて反英・独立を鼓舞した。

しかし、ヒトラーはインド独立の支援に消極的であった。1941年12月、太平洋戦争が始まり、日本軍がシンガポールを陥落し、ビルマに迫った。その間、捕虜となった英国軍の中のインド兵は、日本軍が工作して編成したインド国民軍（INA）に加わった。当初は、ラス・ビハリ・ボースがINA司令官だったが、老齢のため、日本軍はネタジを招聘することを決めた。

ネタジの自由インド仮政府首班ならびにインド国民軍司令官就任

ネタジはスマトラに到着後、直ちに日本に行き、東條英機首相からインド独立闘争を支援する約束を取り付けた。その後、シンガポールでラス・ビハリ・ボースの後を引き継いで、INAの司令官となり、東條首相とともに閲兵した。この間、モハン・シン司令官の解

任を巡り解体されたINAを立て直すなど、その後のインド侵攻の体制を整備した。1943年10月、ネタジは自由インド仮政府をシンガポールで設立し、首相（首相）となった。日本をはじめ、独、伊、ビルマ、タイ、満洲など8か国が承認した。

翌11月に、東京で開催された大東亜会議にオブザーバーとして出席。日本が占領したインド領のアンダマン・ニコバル諸島を移管する約束を得て、領土を持つ独立国家の体裁を整えた。翌12月には、独立インド（自由インド仮政府）の初代首相として、アンダマン・ニコバルを訪れている。

インパール作戦

インド侵攻作戦の山場となるインパール作戦は、当初実施の困難性、不十分な現地調査などの理由で延期されていた。しかし、河辺正三ビルマ方面軍司令官が、ラングーン赴任時に、東條首相から、「戦局を打開してほしい」と言われたので、これを聞いた牟田口廉也第十五軍司令官は、最終的にアッサ

ムまで行くインド侵攻計画の実行を決定した。東條首相から計画の承認を得て、1943年12月、作戦実行を決定した。これをネタジはインドを解放するための好機と判断し、牟田口司令官に会い、共同作戦を申し入れ、合意された。

しかし、日本側は、戦闘は短期で終わると見て、食料・物資の補給の兵站も十分でなく、さらに激しいモンスーンの豪雨が予想より早く到来し、苦戦を強いられた。日本軍はコヒマ、およびインパール近郊まで侵攻。INAもインパール近郊のモイランまで侵攻し、自由インド仮政府の三色旗を掲揚した。現在、モイランには、マニプル州政府が建立したINA戦争博物館が、INA殉死者公園内に建っている。インド政府観光省によれば、INA本部がモイランに置かれ、3か月「統治」していた。

英国によるインド国民軍裁判

日本では原爆が投下され、敗戦が色濃くなるにつれ、ネタジはやむなくソ

連に支援を求めることを決め、サイゴンより大連に向かう途中の台北で、離陸直後の飛行機の墜落で亡くなったとされている。日本が終戦の詔勅を行った3日後の8月18日であった。しかし、インド独立の悲願はこれで断たれたわけではなかった。日本の敗戦により、INA将兵も降伏し捕虜となり尋問を受け、確信犯となった将校に対する裁判が、1945年11月5日、インド、デリーのレッドフォートで開かれた。

裁判ではシャー・ナワーズ・カーン（ムスリム教徒）、グルバクシ・シン・ディロン（シク教徒）、P・K・サヘガル（ヒンドゥー教徒）と宗教の異なる幹部3名を選び、被告として裁判が始まった。これに対し、民衆が被告を救おうと、デリー、カルカッタ、ムンバイなど主要都市で、激しい反対運動を展開した。

インド独立実現

弁護団に招かれて日本から出席した証人たちも、自由インド仮政府は、日本の傀儡ではなく、独立国の軍に属す

る者として行動したと陳述。日本軍との間には協同の関係はあっても、INAの行動は独自のものであったと証言した。これら弁護士団の陳述と、国内の激しい反対運動により、検事側は、やむを得ず、赦免とすることを決定し、被告たちを釈放した。さらに、翌年2月には、ムンバイ、カラチなどの英印軍海軍乗組員も反乱を起こし反旗を翻した。

英国は、第2次世界大戦で、ほとんど財政が破綻していたこともあり、インドに権力移譲を行うことを決め、1946年3月に労働党の閣僚使節団を派遣し、インドは1947年8月15日に独立した。

モディ首相のネタジに対する再評価

近年、モディ首相のネタジに対する評価が高まっている。INAがインパールから南に約20キロメートルのモイランに侵攻し、国旗を掲揚した場所に2005年に「INA戦争博物館」が建設されている。また、映画『ボース：忘れられたヒーロー』が封切られ、ネ

タジの独立闘争が改めて一般に理解されることとなった。この映画に続いてINAに対するレッドフォートでの軍事裁判をテーマにした映画『RAAG DESH (祖国への愛)』も作られ、2017年に公開された。

さらに、モディ首相は、ネルー首相以下インド国民会議派政権が公開していなかったネタジに関する機密文書を含む約300件の文書を2016年に公開した。これにより、インド国民会議派政権が隠していた事実が次々と明らかになり、近年ネタジに関する本が、インドで出版されている。

また、2018年には、ネタジが自由インド仮政府の首班として、日本政府から割譲を約束されたアンダマン・ニコバル諸島を訪問したことを記念し、その一島を「ネタジ・スバス・チャンドラ・ボース島」に変更した。

翌2019年には、ニューデリーのレッドフォートにネタジ博物館を建設、さらに、2022年1月23日のネタジの誕生日を「武勇の日」と定め、この日から、26日のインド共和国記念日の

行事を開始することに決めている。併せて、ネタジの銅像をニューデリーのラージパット(王の道)にあるインド門に建立した。なお、インド政府は2022年9月に、ラージパットをカルタヴィヤパット(義務の道)に改名した。

終戦後の日印関係

インド鉄鉱石の供給により、日本は経済の高度成長を実現できた。

日本の戦後の高度経済成長は、インドの鉄鉱石の供給があったからこそ実現したというのは、あまり知られていない。インドの鉄鉱石のおかげで日本の鉄鋼生産が順調に回復し、1950年に起こった朝鮮戦争の特需にも日本は応えることができたと言われている。1958年には、インドとは鉄鉱石の長期契約も結ばれた。このインド側の決断の背景には、日本のネタジに対する独立闘争支援も要因の一つにあったと私は見ている。

武藤友治著『インド私録』にも、「日本人としてネルー首相について決して忘れてならないことは、1950

年の半ばにネルー首相が自らの判断で、インド産の鉄鉱石を日本に長期的に輸出することに応じた歴史的事実である。朝鮮動乱の特需景気で復調の兆しを見せ始めた日本経済が最も必要とした物は、工業の発展に欠かせない鉄の原料であった。今でこそ日本は多くの国から鉄鉱石を入手できるが、当時は敗戦国日本をまともに相手にする国はなく、日本への鉄鉱石の輸出に依じてくれた国はインドだけであった。しかも、それはネルー首相の政治的判断によるものであった。戦後の日本経済の復興に大きく貢献したのが、インド産の鉄鉱石であり、ネルー首相は日本の経済発展の大恩人であったと言わねばならない」と述べている。私も、その昔インドの鉄鉱石の長期契約を推進した当時の富士製鉄（現日本製鉄）の常務、田部三郎さんから、日印経済委員会の席で、「インドの鉄鉱石がなかったら、日本の経済発展はなかった。日本はインドに足を向けて寝られない」と言われたことがあった。

インドは上野動物園に象のインディ

ラ（ネルーの娘の名。後のインディラ・ガンディー首相）を贈り、敗戦で打ちひしがれていた日本人を元気づけた。これらインドの好意に対し、1957年5月、岸信介首相が訪印し、日本として円借款という資金協力をインドに供与することを表明した。岸首相は、首相就任後最初の訪問国としてインドを選んだ。1957年10月には、ネルー首相が娘インディラを連れて日本を訪問し、日本の円借款第1号が1958年に供与された。

パール判事のA級戦犯無罪論

ここで、1946年5月3日から連合国が日本で開いた東京裁判で、日本のA級戦犯被告全員の無罪論を、判事の中でただ一人主張したラダビノード・パール判事についても触れる。

パール判事はネタジと同じベンガル人で、先に述べたINAの軍事裁判に反対する全国的運動が1946年1月カルカッタで発生した当時、カルカッタ大学の総長だった。パール判事は、カルカッタ大学の学生や労働者のスト

ライキ、集会、デモ行進が行われた現場に赴いたことを例にあげ、学生運動と、ネタジおよびINAに相当同情的であったと見ることができると、『パール判事』の著者、中里成章さんは述べている。

さらに、パール判事が東京裁判の判事の辞令を英領インド政庁から受け東京に到着したのは、1946年5月。東京裁判に臨むパール判事の基本姿勢にも影響を及ぼしたと指摘し、パール判事のA級戦犯を無罪とする意見書は、ボースの名誉を守る役割も担っていたかもしれないと述べている。

ネタジの遺骨はインドに帰ることができるか

モディ首相は、ネルー首相以下会議は政権が機密扱いにしたネタジ関連の公文書を公開した。ネタジが1945年8月18日に、飛行機事故で死亡したことを疑問視する声が、当時より上がっている。公開された書類には、事故死に関する書類も数多く含まれている。これらの疑問に対し、インド政府は過

去3度にわたって調査委員会を組織し、1956年(チャー・ナワーズ委員会)、1970年(コスラ委員会)、および2006年(ムカルジー委員会)にそれぞれ調査・報告書を作成させた。これらによれば、第一回目と第二回目は、

ネタジの台北での飛行機事故死を結論付けた(ただし、メンバーの一人であるネタジの長兄スレス・チャンドラ・ボースは、これを拒否し、関係者一同を驚かせた)。しかし、第三回目のミッションでは、ネタジの台北死亡説を否定した。ネタジの遺骨は、杉並区の蓮光寺に預けられており、毎年8月18日に法要が行われている。インド国内で政治問題化している、日本側が再三再四お願いしてきたが、引き取られないままとなっている。

インド独立に対する日本の貢献

日本のインド独立支援は、振り返ると、日本軍によるシンガポール陥落で英国の世界支配の一角が崩れ、英印軍の将兵がINAに集結したことから始まったと理解できる。岡部伸氏も著書

『第二次大戦、諜報戦秘史』で、英国軍守備隊の7割を占めるインド兵を戦わずして投降させ、反英のINAを誕生させたと指摘している。

ウィキペディアによれば、英国の歴史学者アーノルド・トインビー博士は、大東亜戦争(太平洋戦争)について、『オブザーバー』1956年10月28日で、「アジア・アフリカを200年の長きにわたって支配してきた西洋人は、あたかも神のような存在だと信じられてきたが、日本人は実際にはそうでなかったことを、人類の面前で証明した。これはまさに歴史的な偉業であった。：日本は白人のアジア侵略を止めるどころか、帝国主義、植民地主義、人種差別に終止符を打ってしまったのである」

「日本人が歴史に残した業績は、アジアとアフリカを支配してきた西洋人が過去200年間考えられてきたような不敗の半神(demigod)ではないことを明らかにした」。

また『毎日新聞』1968年3月22日において、「1840年のアヘン戦争以来、東アジアにおける英国の力は、

この地域における西洋全体の支配を象徴していた。1941年、日本は全ての非西洋国民に対し、西洋は無敵ではないことを決定的に示した。この啓示がアジア人の士気に及ぼした恒久的な影響は、1967年のベトナムで明らかである」と述べている。また、先に英国は、第2次世界大戦で、ほとんど財政が破綻していたと述べたが、これも日本が関わった戦争の結果であったことも指摘できよう。

ネタジとINAの努力と日本の支援で、インドの独立が早められたことは、正にトインビーの指摘に適合する好例であるし、改めて日印間で共有すべき歴史であると言えよう。我々日本人としては、現在インドが国際社会において大国としての確固たる地位を固めつつあると同時に、インドと日本の関係が一層深まりつつある状況下、両国民が日印の戦後の歴史を深く理解することは、日印双方の今後の相互協力が、より強固なものとなると確信する。

今後の日印関係のさらなる強化

日印関係は、現在、政治・経済ともに好関係にある。長年にわたる政府開発援助（円借款など）を通じて、電力、道路、鉄道、メトロなど様々なプロジェクトがインドの経済発展を支援してきた。現在、インドのムンバイ―アーメダバード間約500kmを結ぶ、日本の新幹線技術による工事が早期の完成を目指して進展している。

さらに、民間企業の対インド投資として、忘れてならないのは、鈴木自動車工業（現スズキ）の乗用車生産販売の投資である。当時一般の日系企業がインドへの投資に尻込みをしている中であって、鈴木修元社長（本稿執筆当時は相談役。故人）の先見力と英断により、日系企業の対インド投資が本格的に動き出した。「鉄鉱石」と「スズキ」、これが日印経済関係の深化の始まりのキーワードと言っても過言ではない。日本は鉄鉱石でインドに助けられ、インドはスズキで日本に助けられたと言える。

現在、日本のさらなるデジタル・トランスフォーメーション（DX）に向けて、

インドの高度人材の需要が高まっている。さらに、従来からの高度専門職のみならず、建築業、介護士、農業などの特定技能、技能実習などの分野でも、日印関係の拡大が期待されている。

3. インドの政治

モディ首相を巡るインドの政治動向：第3次BJP政権が成立

モディ首相（インド人民党・BJP）は2014年第16次総選挙で政権奪取（下院545議席を5年ごとに総選挙）。クリーン・インド、メイク・イン・インド、高額紙幣廃止、統一間接税（GST）を導入、労働法改正などを行った。

続く2019年第17次総選挙で、モディ第2次政権。2019年8月、ジャムムー・カシミール州を2分割して連邦直轄地化。同年12月、インド市民権法改正。2014年12月31日以前にインドへ入国したアフガニスタン、パキスタンからのヒンドゥ教徒、シク教徒、仏教徒、ジャイナ教

徒、ゾロアスター教徒、キリスト教徒の難民にインドの市民権を認めた。2020年11月生産連動型優遇策（PLI）を導入。いわば、モディ首相は過去10年かけてインドを牽引してきた。

次の第18次総選挙は2024年4月19日に投票が開始された。6月4日に結果が判明した。前回303議席を獲得するなど圧勝したBJPは今回、63議席減の240議席にとどまり、単独での過半数確保に失敗。有力地域政党などの連立で「第3次モディ政権」をスタートさせることになった。BJP政権は基本政策としてヒンドゥ至上主義を掲げてきたが、この政策を堅持したまま、経済政策を推進していかねば、これからの船出は慎重にならざるを得なくなった。毎年約1200万人増加する若年労働者の失業率改善、インフレの抑制などの課題も抱えた船出となった。

グローバル・サウスを主導

モディ首相は、2022年1月12日、ニューデリーで開催されたG20

オンラインサミットで、「グローバル・サウス」の声を反映させていくことを強調。新型コロナウイルスの薬、ワクチン供給で支援する姿勢を鮮明にした。「インドがG20の議長国の2023年、「グローバル・サウス」の声を大きくしていこうとするのは当然だ」。グローバル・サウスの国々の声を反映させていく考えを強調した。

グローバル・サウス主導は、インド外交の重要な柱。ヨガ、アユルヴェーダなどのソフト外交もまじえて積極的に展開している。因みに6月21日は国際ヨガの日となっている。

IT頭脳立国インド

インドの Statesman 紙によれば、インドは毎年150万人のインド人技術者を世界に派遣している。

ITエンジニアはカースト制に縛られない。努力してインド工科大学（IIT）に入学し、米国に渡って活躍している、IBMのアルヴィンド・クリシュナ、Googleのスタンダル・ピチャイ、Microsoftのサティア・ナデラ、

他多数。米国での成功者に続けと、若いエンジニアがIITを目指す。インドでは、IITの他にも、National Institute of Technology 他、民間の工科大学が多数ある。

インド政府（ネルー首相時代）は1950年にIITカレッジプル校を刑務所跡に建設。現在インド全土に23校あり、入学競争率は50〜100倍である。

ITエンジニアの他、インド人医師も米国で活躍。英国でも同様に、インド人が活躍。リシ・スナク英国前首相の妻のアクシャナ・ムルティはインドIT大手インフォシスの創業者N・R・ナラヤナ・ムルティの娘でもある。米国前副大統領カマラ・デビ・ハリスもインド系で、カマラ（蓮の花）女神ラクシュミー、デビ（女神）という名を持っており、インド女性の憧れの的となっている。

4. インドの経済

インドは世界第5位の経済大国として、その成長の勢いを強めており、多

くの国際的な企業がインド市場への関心を高めている。この背景には、モディ政権が前政権（国民会議派マンモハン・シン首相）から引き継いだ一連の経済改革と、パンデミックからの力強い回復が大きく寄与している。清潔なインド（スワッチャ・バールト）、生体認証識別システム（アードール・カード）、統一間接税（GST）の導入、さらに、インフラ投資の拡大や「Make in India」政策、高額紙幣廃止、労働法の改正などの産業育成策が功を奏し、インド経済は多方面での成長を遂げ始めた。

インドは2001年頃に登場したBRICSの10か国から成る新興国の一つとして新たな注目を浴びだし、モディ首相の出現により、大きく成長したといえる。

在インド日系企業の状況

在インド日本国大使館、総領事館および日本貿易振興機構（JETRO）は、インド各地の日本商工会および日本人会の協力を得て、インドに進出してい

る日系企業の拠点情報を2022年10月時点で取りまとめた（インド進出日系企業リスト2022）。全インドにおける日系企業数合計は、1400社（2021年の企業数1439社と比較し39社減、2・71%減）となった。全インドにおける日系企業の拠点数合計は、4901拠点（2021年の拠点数4790拠点と比較し、111拠点増、2・3%増）となった。

2022年は、ラジャスタン州、カルナタカ州で企業数が数社増加した一方、ハリヤナ州、マハラシュトラ州などで減少した。拠点数を主な業種別に見ると、「卸売業・小売業」や「金融業・保険業」で増加した一方、「宿泊業、飲食サービス業」や「教育、学習支援業」では減少した。また、全インドの日系企業数の約半分、拠点数の約3分の1は製造業となっている。2021年に引き続き、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の影響などによる事務所の閉鎖や、合併・日系資本撤退といった企業の再編、拠点統廃合の動きにより、企業数が減少

した。他方、拠点数は主に既存企業の新規拠点設立が見られ、増加となった。近年では、小売、外食分野でもインド進出が進んでいる。老舗の日清食品（カップヌードル）の他にもユニクロ、ダイソー、COCO壺番屋、すき家、亀田製菓、ユニ・チャーム、大手不動産開発、機械メーカー、病院、IT等々の様々な日系企業が、成長するインドに挑戦している。

あとがき

筆者は2020年2月に、合計22年のインド滞在を終えて帰国した。引き続きインドと日本の交流を拡大すべく支援を続けている。2022年9月2日には、「チャンドラ・ボース生誕125年記念実行委員会」を有志で立ち上げ、インド大使館と共催で、ネタジ講演会と「ネタジ文庫」の設立式を開催した。「ネタジ文庫」として、各方面から、ネタジ・スバス・チャンドラ・ボースに関連する書籍・論文を寄贈いただき、インド大使館図書室に寄贈した。現在約200冊の書籍・論文の閲

覧（一部貸出）が可能となっている。リストアップされた書籍・論文は「チャンドラ・ボース生誕125年記念実行委員会」のホームページ（<https://www.chandrabose125japan.com>）から「献本リスト他資料」をクリックしてご覧いただくことができる。（2023年10月26日、11月9日・公開講演会）

筆者略歴（くぼき・かずまや）

1947年千葉県佐原市（現・香取市）出生。幼少の頃、サーカスのインド象に乗り感激。1971年東京外国語大学インド・パキスタン語学科（ヒンディー語）卒。1971～2000年三菱商事勤務、一貫してインド関連業務に従事。2003年ジェトロ海外投資アドバイザーに就任、2006年同バンガロール事務所初代所長に就任。2020年約17年のバンガロール滞在を終えて帰国。インド総合研究所を再開し、在インドの人材派遣企業、会計・税務事務所、法律事務所を支援している。

公開講演会記録

ボルゲーゼ美術館に見る
ギリシア神話世界

美術史家 塚本 博



1. はじめに

かつてヨーロッパ諸国では、18世紀から19世紀にかけて「ローマの驚異」という言葉が盛んに使われ、旅行者たちは憧れのローマをめざした。画家たちは古代の遺跡を描き、文化人たちは永遠の都のあちこちで豊穡な芸術品を実見して祖国へとその驚異を伝えた。しかし、世界大戦が勃発した20世紀になると、ローマは次第に荒廃し、市道を歩いてもパリやウィーンほどの洗練された街並みや豪華な建造物は見られなくなる。ローマの驚異は、宮殿の角

を曲がると突然現れるトレヴィの泉や、映画『ローマの休日』における最後の記者会見場として使われたコロナ宮殿辺りに、かつての栄光を偲ばせる。このような状況下において、ローマ市中でもっともよく昔日の驚異を体現しているトポスがまさにボルゲーゼ美術館（写真1）である。この美術館の建築はいわゆるヴィラ、別荘の邸宅であり、ルーヴル美術館やヴァティカン美術館のように巨大な建造物ではない。したがって上階の絵画と、下階の彫刻を適度な時間で一巡することができる。

ローマ教皇パウルス五世の甥にあた

る枢機卿シピオーネ・ボルゲーゼの美術収集を基盤として成立したボルゲーゼ美術館は、ティツィアーノやベロニーニなどの巨匠による数々の名作により訪問者を魅了する。しかし、この



写真1 ボルゲーゼ美術館

瀟洒な美術館を訪れる者は、めざす名画以上にその壮麗な室内や、調度品にも目を奪われ、特別な世界に入り込んだ感興をおぼえる。そこにはキリスト教の聖書関連の宗教美術と並んで、ギリシア神話世界が歴代の美術家により豊かに展開して、誰もがここに「ローマの驚異」を実感する。ローマはカトリック・キリスト教の中心地でありながら、ギリシアからの美術遺産を受け継ぎ、地中海の古典古代美術を継承してきた。とりわけギリシア神話を主題にした美術品には名作が多い。

2. 変身物語のギリシア神話

主神ゼウスや知恵の女神アテナが現れるギリシア神話がローマの作家オウィディウスにより受け継がれたとき、メタモルフォーシス（変身譚）が特に生まれ、多彩な脚色が加えられた。そのため古代のギリシア美術にはそれほど作例のない変身物語が、イタリア美術ではほとぼしる泉水のごとく様々な傑作を生み出している。壮麗な

ボルゲーゼ美術館をこの変身物語の視覚化という観点でめぐってみると、意外なくらい趣向に富んだ名品に出会う。レオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロの影響を受けた北イタリアのルネサンス画家コレッジョの「ダナエ」（1531頃）（写真2）は見ごたえのある代表作で、ゼウスが天から黄金の雨となって降り注ぐ。ダナエの父、アルゴス王アクリシオスは、自分の娘の子により将来殺害されるという神託を聞き、娘のダナエを青銅の地下室に閉じ込めてしまった。さすがのゼウスも鳥や獣への変身では彼女に近づくことができずに、黄金の雨に身を変えたのだ。コレッジョが描く美しい娘ダナエは、そうとは知らずに寝台に身を横たえている。左手の愛の神は頭上を見上げ、黄金の雨に気付いている。画家はこのような変身物語を4点連作で描き、「レダ」はベルリン国立美術館、「イオ」と「ガニメデス」はウィーン美術史美術館にある。これらは、マントヴァの支配者ゴンザーガ家が神聖ローマ皇帝カール五世に献上するために、



写真2 コレッジョ「ダナエ」

コレッジョによりすべて制作された。万能の天才レオナルド・ダ・ヴィンチも変身物語に関心を抱き、レダを構想して各種の素描などを手懸けている。そのレオナルド原作の写しがボルゲーゼの「レダと白鳥」（16世紀前半）（写真3）である。ラケダイモンの子チュンダレオスがスパルタの王になったとき、その妃は美貌のレダであった。天空のゼウスはこの妃レダに近づくために、白鳥に身を変じた。絵の中の白鳥は、まるで彼女を抱くように大きな翼を湾曲した腰にあてがっている。その嘴は彼女に口づけを求めめるかのような。彼女の体軀は官能的にS字

曲線を描き、白鳥の首はさらに大きく曲がりくねる。こうした写しは、各美術館に複数所蔵されているが、それらを比較検討すると、背景は個々に異なるが、レダと白鳥の組み合わせはほとんど共通した図柄になっていることがわかる。後続のラファエロもまた、このふたりの並ぶ情景だけを素描にしている。これらのことから、おそらく、レオナルドは中心部分だけをしっかりと描き、背景については未完成のままであったと推測される。彼らの交接の結果、レダが生んだふたつの卵は写しにより異なり、ボルゲーゼの作例では、すでに成長した双子の幼児が見られる。美術館階下のバロック彫刻にも変身物語の秀作が旅人を待ち構えている。それはベルニーニの「アポロンとダフネ」(1622〜25)(写真4)であり、



写真3 レオナルド原作の写し「レダと白鳥」

この美術館でもっとも人気が高い。生涯処女を狩りの女神ディアナに誓ったダフネは、どんな美青年が言い寄っても、相手にすることはなかった。そんな清純なダフネに太陽神アポロンは恋をして、彼女を追い駆ける。輝けるアポロンがダフネに追いつき、彼女に触れようとした瞬間、ダフネは身を翻して月桂樹に変身する。その指先は葉に変わり、下半身は樹木の幹へと姿を変じた。その体軀は激しく回転するように見える。ルネサンス期にも同主題作品があるが、それはきわめて静的であり、ベルニーニ作品はまさにバロックの動勢感を体現している。この神話物語によりダフネすなわち月桂樹はアポロンの樹木となった。このベルニーニ作品はメタモルフォーシスを視覚化した美術史上最高の逸品と言えるだろう。

エステ家の宮廷があった北イタリアのフェラーラには、ギリシア神話の作品が多い。すでに15世紀の頃、スキファノイア宮殿にアポロンやアテナの登場する大きな壁画が描かれている。このフェラー

ラの有力画家ドッソ・ドッシの「ディアナとカリスト」(1528頃)は、狩りの女神ディアナに処女を誓ったカリストの数奇な運命を物語る。天空のゼウスはこの可憐な彼女に懸想し、ふたりは夜をともにして交わり、やがて彼女は主神の子を宿してしまった。そのことを周囲には秘密にしていたのだが、ニンフたちとの水浴の際に、女神ディアナに彼女は裸体を見られてしまふ。膨らんだ腹部はすぐに女神の目にとまり、その懐妊は露見する。処女の誓いを破った罪に、女神はカリストを熊に変えてしまった。ドッシの絵では、中央下に妊娠した腹部を露わにしたカリストが見える。

この主題はヴェネツィア派の巨匠ティツィアーノの作品にも取り上げられている。その英国にある絵では、多



写真4 ベルニーニ「アポロンとダフネ」

くのニンフの中にカリストが腹部を見せて登場し、女神は右手に豊満な裸体を見せて現れる。この主題でふたりの画家はどちらも、カリストを人間のまに表現し、変身の話は見る者にゆだねられている。その後、カリストの子が森で出会った熊が実の母とは知らずに殺そうとしたとき、天空から下界を見ていた主神ゼウスは彼女を哀れに思い（あるいは責任を感じて）、天に上げて輝く大熊座にしたという。

3. ローマ建国神話の原点

審美眼のある美術収集家の枢機卿シポオーネ・ボルゲーゼは、交遊のあるローヴェレ家からバロッチの名画「トロイアから逃れるアイネイアス」（1598）（写真5）を贈られた。これは今もボルゲーゼに展示されているが、ギリシア方の軍勢により落城したトロイアから勇者アイネイアス（イタリアではアイネアス、あるいはアエネアス）が家族を伴って脱出するという劇的な神話物語である。この逸話はその後、ア



写真5 バロッチ「トロイアから逃れるアイネイアス」

イネイアスがローマに渡り、ローマ建国神話の原点にもなっている。すなわち、雌狼により育てられた双子の兄弟ロムルスとレムスを生んだ母は、王女レア・シルウィアであり、彼女はこの勇者アイネイアスの血を受け継いでいた。しかも、アイネイアスの父はアンキセスであり、彼は美の女神アフロディテ（ヴィーナス）と結ばれて勇者になる子をもうけた。

このようにローマの建国に関わる英雄であるから、シポオーネは強い関心を抱き、やがて彼がその天才を認めた青年彫刻家ベルニーニにこの神話主題を彫刻で造るよう委託した。



写真6 ベルニーニ「老父アンキセスを担ぐアイネイアス」

こうして誕生したベルニーニ初期の作品が「老父アンキセスを担ぐアイネイアス」（1618—20）（写真6）である。バロッチのものとの絵画では、背景に燃え盛るトロイアの城が見えるが、彫刻ではそれは当然割愛され、勇者が老父を担ぎ上げ、息子アスカニウスを伴う巧みな群像になっている。このふたつの芸術作品を比べてみると、絵画と彫刻という芸術分野の原理的な違いが歴然とする。絵画芸術は本来物語性を豊かに展開し、彫刻芸術は逆にひとつの塊の中に物語性を凝縮してモニュメンタルな造形に仕上げる。このようにローマ建国神話の端緒は、祖国愛に満ちた勇者の彫刻として枢機卿の前に結実し、ここにバロック彫刻が醸成される。この経緯を考えると、シポオーネ・ボルゲーゼは単なる美術収集家である以上に、言わばバロック様式のプ

ロデュースの役割も担っていたことがよく理解できる。

トロイア戦争には長大な顛末があり、ギリシア方の英雄アキレウスがトロイア方のヘクトールを打ち取る劇的な場面が名高い。したがって、トロイアがアキレウスの遺児ネオプトレモスにより打ち破られる以降の物語は、ギリシア方から見れば最終章のごとき情景であるが、シピオーネやベルニーニにあっては祖国ローマの原点となっていた。こうしてバロッチの絵画のエッセンスは、ベルニーニの彫刻に結晶化して受け継がれ、この歴史にこそ、絵画と彫刻をアンサンブルとして収集展示するボルゲーゼ美術館の意義深い理念が明示される。本邦においては、この絵画と彫刻が互いに照らし合い共鳴するような美術館は企画されていない。

4. 冥界の王とサテュロス

シピオーネに認められたベルニーニが制作した次の「プロセルピーナを掠奪するプルート」(1621~22)(写真

真7)は、まさに動きに溢れるバロック彫刻の典型的な作例である。神話上の名前は各国により呼び方が異なるが、ギリシアでは「ペルセフォネを掠奪するハデス」と表記される。ハデスはすなわち冥府の王、支配者であり、彼は地上に現れて、穀物の女神デメテルの娘ペルセフォネをさらった。そして彼女は柘榴を食べてしまったので、冥府から帰ることができなくなる。ラファエル前派の中心的な画家ダンテ・ゲイブリル・ロセッティが描くペルセフォネは手にその柘榴を持ち、その表情には不安な心情がぎざしている。地下に閉じ込められた娘を探して、女神デメテルは火をかざし各地をめぐり、主神ゼウスにその嘆きを訴えた。そこでゼウスはハデスに対して、ペルセフォネが毎年3分の1は冥界にとどまり、あとは神々と暮らすように命じた。こうして彼女は春になると、地上に戻ってくるができるようになった。この逸話は、彼女が豊穡の女神の



写真7 ベルニーニ「プロセルピーナを掠奪するプルート」

た。この逸話は、彼女が豊穡の女神の

娘として、その「種子」であったことを暗示し、地下にまず蒔かれ、やがて芽生えて春には地上に現れることを物語る。

ベルニーニのプルートすなわちハデスは冥界の王たる冠をかぶり、力任せに細身のペルセフォネを抱き、さらおうとしている。彼女の足元には咆哮する怪物ケルベロスが見え、群像の情設定を巧みに演出している。冥府の王にあらがう娘は彼から逃れようと必死でその頭部を押しつけようとしている。先行するアイネイアス群像に比べて、数年のうちにベルニーニの技量は飛躍し、バロック彫刻の巨匠に成長したことが理解できる。この頃、彫刻家はまだ24歳であった。彼の先輩ミケランジェロは、同じ年で名高い「サンピエトロの

は、同じ年で名高い「サンピエトロの

「ピエタ」を彫り上げている。

このペルセフォネの掠奪は、一見すると狂暴な男に可憐な娘がさらわれるという暴力的な神話主題に見えるが、西洋美術史を振り返ると、そこには突然の死への象徴性が宿っていることが見えてくる。古代ローマのサルコフアゴスと呼ばれる死者の石棺にはこの特異な主題がしばしば現れ、各地に図柄がわかる作例が残っている。筆者はアーヘン大聖堂の宝物館と、アマルフィ大聖堂の中庭でそれを実見したことがある。どちらもハデスは戦車に乗り、ペルセフォネを抱えて冥界に向かい疾走している。これはすなわち、老衰、病気、事故などにより突然に亡くなった人への供養のごとき神話の選択である。古今東西どこでも、突然の死は、冥界からハデスが現れてその人をさらったと解釈するしかない。

彫刻の第8室はシレノスの間と呼ばれ、酒神バッカスの眷属シレノスやサテュロスなどが見られる。特にリュシッポス原作の模作「踊るサテュロス」(2世紀)は顔中に髭をはやし、

下半身が獣のサテュロスを巧みに造形化している。古代ギリシア彫刻の巨匠リュシッポスは、古典後期の作家で腕を自在に周囲に伸ばして、人物が空間にはたらきかけるような作風を打ち立てた。このサテュロスにも酔って踊る動作が如実に表れている。ミケランジェロのバルジェロ国立博物館にある「酔えるバッカス」では、酒神の背後にサテュロスは少年の姿で登場し、葡萄を食べている。これらの酒神バッカス(ギリシアではディオニソス)、サテュロス、マイナデスたちは、ギリシアの陶器画、ローマ浮彫などに頻繁に表れ、歴代の美術家の想像力を強く刺激した。

この部屋のサテュロスはデンマークの彫刻家トルヴァルセンが近代になって修復している。彼はカノーヴァと同じ新古典主義の名高い彫刻家で、ボルゲーゼ美術館の内装には、この新古典主義の装飾が至るところに反映している。この部屋の元来の主役であった多くの古代彫刻は、ナポレオンの支配した時代にルーヴルへともたらされた。

これらはフランス側の様々な美術品との交換を経て運ばれたものであり、ルーヴルの古代彫刻部門には今もかなりの数のボルゲーゼ旧蔵作品が展示されている。

5. 横たわるパオリーナ

ボルゲーゼ美術館では、ギリシア神話の主題を扱った個々の作品が優れているばかりでなく、展示している部屋の環境自体にある種共通した雰囲気を感じ取れる。地上階右の第1室には、ナポレオン・ボナパルトの実妹「横たわるパオリーナ・ボルゲーゼ」(1808)(写真8)があるが、彼女はりんごを手に持ち、美と愛の女神ヴィーナスに扮している。この作品はイタリアの作家アントニオ・カノーヴァの代表作である。ナポレオンは戦術に才能を発揮しただけなく、政略結婚にも敏感で、美しい妹パオリーナを斜陽のボルゲーゼ家に嫁がせた。フランスの英雄には明らかにボルゲーゼの膨大な美術コレクションが視野に入っていた。

事実、それほどの価値のない美術品と交換に優れた古代彫刻が次々にローマからパリへと運び出された。

ロココ様式から新古典主義へと時代が移り変わると、ナポレオンの近くには画家ダヴィッドと彫刻家カノーヴァが登場する。現在ルーヴルにある、カノーヴァの彫刻「アモールとプシケ」は、ナポレオン麾下の指揮官ヨアヒム・ミュラが当時所蔵していた。英雄はこの傑作を見て、その愛の物語と



写真8 カノーヴァ「パオリーナ・ボルゲーゼ」

表現の美しさに魅せられた。その結果、彼は次々に新古典主義の巨匠カノーヴァに作品を委託する。ボルゲーゼのパオリーナもそうした流れの中で制作された彫像で、典雅な女性像からベッドのクッションに至るまで精巧に、そして優美に彫り出されている。ここで目を天井に向けると、そこには18世紀末に描かれた「パリスの審判」が見えてくる。若い牧人パリスは、3人の女神、アテナ、ヘラ、アフロディテ（ヴィーナス）からもっとも美しいと思うひとりを選び、彼女に黄金のりんごを与える役目をゼウスによって課せられた。そこで若人はヴィーナスを選び、彼女にりんごを渡すことになる。つまりここで見事に下にあるりんごを持つ彫像のパオリーナに物語は接続する。彫刻は一種のモニュメントであるから、りんごの経緯については語る事ができない。それが天井画で謎解きされるのだ。

ここにおいて、はじめに述べたような「ローマの驚異」と呼べる空間芸術が明白に見えてくる。すなわち、ボル

ゲーゼ美術館は巨匠たちの名画や名作を、単体として見せるだけではなく、明らかにその部屋全体で共鳴するような芸術的ミュージューを数百年かけて創出している。そこには美術史上に名を残す巨匠も、マイナーな画家も時代を超えて共同で参画し、このヴィラ美術館を驚異の空間に仕立てている。このような視点で美術館を見て回ると、第11室の天井画「神々の会議」が、まるで神話全体の序論のように神格が出揃った画面に見えるだろう。しかも、そこでは変身譚の一例である「驚にさらわれたガニュメデス」が、神々に紹介されている。しかし、だからと言って室内の至るところにある絵画の主題を詳しく読み解く必要などはない。自分が知っている範囲の神話物語を、絵を通して楽しめばいいのである。心に余裕がなければ芸術世界を真に受容することなどできない。

6. 美神ヴィーナスの楽園

イタリア美術を愛したドイツの文豪

ゲーテは、ワイマールの自邸にティツィアーノの名作「聖愛と俗愛」のうち、裸体のヴィーナスだけの模写を飾っていた。古典美術を愛好する文豪にとつては、ボルゲーゼのこのヴィーナスこそ古典的な美の典型と映っていたのである。この「聖愛と俗愛」(1514)は、ヴェネツィア随一の画家ティツィアーノ・ヴェチェリオが青年期に描いた作品で、通常右に裸体のヴィーナス、左に着衣のヴィーナスと解説される。それはかつて図像解釈学の大家パノフスキーがふたりの女性を象徴的にそのように解釈したことによる。しかし近年になり、洗浄修復した結果、絵の中にふたつの名家の紋章が見出され、この絵は一種の結婚記念画であることが明らかにされている。

筆者が先ごろ翻訳出版した『ティツィアーノの女性たち』(2014年、三元社)の著者ローナ・ゴッフエンは、ヴェネツィアの男性ニコロ・アウレリオとパドヴァの女性ラウラ・バガロットの結婚を記念した絵であることを両家の複雑な歴史を探求して証明し

ている。この見解に基づけば、左にいる女性はまさしく新婚の女性を理想的に表していることになり、その衣裳や薔薇の花も結婚にふさわしい。しかし、その新妻は決して個人的な肖像としては描かれていない。そこには右の裸体のヴィーナスとの調和関係もいくぶんかは図られているだろう。彼女たちふたりの間には浮彫のある古代石棺が置かれ、背後から愛の神アモールが、アトリビュート(持物)である愛の矢を探すかのように水の中に手を入れている。カノーヴァの「ヴィーナスとしてのパオリーナ」やこのティツィアーノの「聖愛と俗愛」以外にも、この美術館にはドイツの画家クラナーハの「ヴィーナスとアモール」(1531)や、ブレシャニーノの「ふたりの愛神の間のヴィーナス」(1525頃)などがあり、ヴィラ建築を飾るにふさわしい美神たちの共演が世界からの訪問者たちを楽しませてくれる。

(2024年12月5日・公開講演会)

筆者略歴(つかもと・ひろし)

1950年東京生まれ。早稲田大学大学院文学研究科美術史学博士課程修了。ルネサンス美術専攻。国際基督教大学、早稲田大学、明治学院大学、横浜市立大学でルネサンス美術やバロック美術などの講師を務めてきた。その間、20年以上にわたり、毎年海外美術ツアーを企画し同行講師として、欧米の美術都市や美術館に赴く。現在は朝日カルチャーセンターやNHK文化センターで、西洋美術史講座の講師をしている。著書は『イタリア・ルネサンス美術の水脈』(三元社)、『聖なる中世美術の輝き、キリスト教美術の展開』(DTP出版)、『すぐわかる作家別・ルネサンスの美術』(東京美術)など。訳書は、G・フォッシ『フィリッポ・リッピ』(東京書籍)、R・ゴッフエン『ティツィアーノの女性たち』(三元社)、R・ゴッフエン『ルネサンスのライヴァルたち』(三元社)など。

陶々俳壇

陶陶結果
2024年12月

兼題 「葱」

馬場由紀子

串焼きの葱の白さや三の酉 橋本紅朽

◎由紀子 「三の酉」と「葱」。江戸の粋を感じさせてくれる。

◎善一 「三の酉」十一月中の酉の日に行われる祭事。鶯神社が有名である。熊手、おかめの面、七福神、宝船等を売る店で賑わつ。

◎三三四 三の酉のお詣りの帰り、焼き鳥で一杯、という景を思い浮かべました。注文はネギまでしようか。この季節ネギの白さと甘さがさわだちますね。酉で焼き鳥を連想させるのも楽しいです。

納豆に欠かせぬ葱でありにけり //

◎善一 納豆にぎざんだ葱が入っていないと美味しくない。よんで詠んでくれた。

◎京

鴨鍋に葱を切らして夜走る 瀬崎明良

◎紅朽 鴨ロース肉をクレソンと長ネギで食すると鴨肉の出汁が葱に染みわたり美味しい。長ネギをあらかじめ焼いて香ばしい風味を加えればたまらない美味しさ。夜でも買いに走りたくなる。

また会おう木枯らし夜道何故寂し //

◎京

◎由紀子 ある程度年齢を重ねると、「また会おう」の言葉が寂しく響くことがある。

詩人逝く言葉遊びのオノマトペ 日野正子

◎三三四 谷川俊太郎氏への追悼句と読みました。詩人は日本語をさまざまな視点から捉え自在に使いこなしていった印象です。スノーピー

の訳も、と知ったときの驚きは忘れられませんが。氏への追悼を込めて特選とさせていただきます。

鍋にせん流しに光る葱の白 //

◎善一 葱は霜が降った後になると白い部分があることに美味しくなる。その白くなった葱を碗に盛って食べながら酌み合っている情景を思い出した。

◎由紀子 立派な葱ゆえに、この葱を美味しくいただくにはと考え、それはやっぱり鍋だろうというところで今夜の献立が決まった。

猪口舐めつ探す切り身や葱鮎鍋 松島三三四

◎明良 鍋の美味し季節に晩酌は欠かせません。野菜を除いて切り身を探すのは同感です。

◎善一 猪口で一杯やったら、葱鮎鍋の中の鮎が少しかかっていなくてそれを探しながら楽しんでる景が面白い。

◎正子 具体的で、面白い。

◎紅朽 江戸発祥の庶民の味。トロなどの脂身の部分はいたみも速く保存に適さないことから冷蔵庫もない当時は加熱で調理することが多く「小鍋だて」の「ねぎま鍋」が誕生したといわれる。酒とも合いやはり締めはそばにしたい。

石路の黄ばかり明かし実家跡 //

◎正子 取り壊された実家跡を久しぶりに訪ねてみると荒れて寂しい庭に石路だけが色を指している。

◎明良 長年引き継がれていた旧家でしようが無人化して取り壊されるところが武蔵野でもあちこちにあります。「黄ばかり明かし」が切ない表現ですね。

霜月や松籟を聴く露天風呂 //

◎善一 旧暦十一月を霜月という。十一月といえは寒い。その寒い中で野天風呂に入るのは少し勇気がいる。しかし入っていると自然に温まり、まわりの松林に吹く風「松籟」を聴く。うらやましていいですね。

葱の束無人売場に積まれをり 大内善一

◎京 目に見えるよつです。長い太いねぎは日本人だけが食べていると思う。中国料理にはない。

◎三三四 郊外や農村地帯にある無人の野菜コーナーですね。農作物は旬になると大量に穫れ、収量を分散するのは難しい。どんなに良質でも、とっておいてあとで売るわけにはいかないもどかしさ。農家出身なので身につまされながら鑑賞しました。

篝火を焚くや高千穂神遊 //

◎三三四 肌を刺す寒さの中、篝火を焚いて神遊びの踊りに酔つ。非日常感に溢れた一句です。

◎紅朽 高千穂神社境内の神楽殿で開催される舞い(神楽)を観て、篝火が灯る神社裏の参道を散策でき、天孫降臨の神秘的な雰囲気味わえる。

◎明良 我が家から大山の山頂に日の光が見えて山火事かと思いましたが篝火だったようです。友人たちの大山詣もケーブルカー頼りの頃です。

寒き夜の鍋を囲みて葱の香り 上野京

長葱は日本食だけありがたき //

◎善一 ポロ市に出掛けて見て回っていると店先で、かつて祖父の話していた訛の人と偶然出会い、なつかしく思い出した様子が窺える。

夕影に白鳥羽根をたたみけり //

◎三三四 冬の日短く、そそくさと落ちていく夕日に白鳥も羽根を畳み、眼を支度をしていく、といったところでしょうか。夕日の赤と白鳥の白、明度が落ちていく時間経過までが思われ、音のない美しい動画を見ているよつでした。

着膨れやベルトの穴をひとすらし //

◎正堂 食が進みズボンのベルト穴を二つずらす。◎京

中国

ウマツチンク

編・訳 上松玲子

覗くべからざるもの

調べたい人の氏名と身分証番号を入力し、49・9人民元払えば相手の婚姻歴やローン申請状況などを、極端な場合は本人の同意もなく調べることもできるアプリについて、そのリスクが報告されている。こうした「恋愛報告」「風険報告」「風険」はリスクの意味（訳者註）などのアプリは一見利用者のためにサービスを提供するアプリのようだが、その真の目的には疑問をぬぐえない。

ネット上には例えば「結婚した後になって相手に80万人民元の負債があったことを知った」というような体験談が書き込まれ、シェアされているのをたびたび目にする。そして、そのコメント欄には結婚前に相手の資産状況を調べる方法について親切なアドバイスが書き込まれているが、実はこれはアプリのダウンロードに誘導する手段なのだ。これで安心を買ったと思いきや、実は必ずしも安心できるとは限らないばかりか、調査対象者の個人情報やネット上に流出し続けることになり、情報漏洩のリスクを負うことになるのだ。

個人情報情報は「経済IDカード」とも呼ばれる最もプライベートな個人情報の一つであり、司法解釈上も高度にセンシティブな情報に分類されている。したがって、個人情報報告書が覗き見られるこ

となどがあってはならず、社会全体の信用が守られるためにも個人情報情報の拡散を防がなければならない。このようなアプリについては、徹底的な解明と取り締まりが必要である。

『北京晩報』2024年12月23日

レンタルで新たな市場を

シェアリングエコノミーが加

熱するなかで、「買わずにレンタルする」という新しい消費モデルがますます多くの消費者に支持されるようになった。データによると、商品取引総額に基づく中国の新規リース産業の市場規模は2023年に152億7000万元に達し、2024年から2028年まで年平均成長率80・3%で成長すると予想されている。

レンタルされるものはドレス、スーツ、漢服（漢族の伝統衣装 訳者註）、民族衣装などの特別な衣類から夏のキャ

ンプ用品、冬のスノースポーツ用品やスノーウェアまでとさまざまだ。昔から家や車などの大型のものレンタルはあったが、現代ではカメラやヘッドフォン、衣類など目立たないさまざまなものがレンタルされるようになった。消費者の需要が個性化、多様化することに伴いより多くの市場が生まれている。

レンタル品を利用したとしても、それによる体験は借物ではなく本物だ。今後、いかに新しいサービスを打ち出すことができるかが、潜在的消費を掘り起こす鍵になるだろう。

『人民網』2024年12月24日

にの根本解決策は

冬になってから、オンライン配車サービス利用者のなかには配車された車が「臭い」車である確率が高くなってきたと感じている人が少なく

い。最近公開された映画の「女性運転士じゃないとどうしても臭い」というセリフが再びネット民の間で熱い議論を巻き起こしている。配車サービスの「滴滴出行」は数日前に謝罪コメントを発表し、「不快に感じた乗客がワンクリックすれば、その車を12か月間ブロックできる」機能を導入するなどの対策を示した。

だが、プラットフォームとしては、この外にも、毎回窓を開けて換気すること、車内の衛生状態に注意することをドライバーに促すことや、利用者に評価を求めるなどの対策もできるはずだ。

このことが映し出しているのは、オンライン配車業界内で競争が激化するなか、大量の人員が業界に参入したため質にばらつきが出ているという現状、そして、ドライバーは車の整備費を抑えようとし、プラットフォームは高額な手

数料をとるばかりで管理に力をいれていないという現状だ。いびつなサービスを消臭するには、より強力で実践的な対策が必要だ。

確かに、ブロック機能は乗客にとって必要なことではある。だが、プラットフォーム側が優先的に取り組むべきは、評価が低いドライバーに対し運転停止などの方法で勤務を抑制したり、訓練・学習などの方法でプロ意識とサービス精神を育てることではないか。また、プラットフォームはドライバーたちが休憩や食事や給油などに利用できる「オンライン配車ドライバーの家」をできるだけ多く設立するべきである。また、すべてのドライバーが規定労働時間内で最低限度の収入を得られるように、科学的に設定された配車システムを導入することも求められる。

『浙江日報』2024年12月25日

春節を待つ心

まもなくユネスコ「無形文化遺産」に指定されて初めての春節を迎える。ネットショッピングモールの「年貨節」

「年貨」は正月用品、「節」は祭―訳者註）にも伝統を見ることができ。例えば、落花生菓子、工芸菓子、砂糖絵など、伝統の技を使って作られた商品は、各地の無形文化遺産をより深く知るきっかけとなる。民俗体験を通じて新年の感覚をより深く感じることができ、郷愁や温かい気持ち呼び起こされる。近年、「年貨節」のようなイベントは全国的に行われるようになり、さまざまな正月商品が売り出され、特別な季節を迎えるという感覚を盛り上げると同時に、消費を刺激している。このことは文化観光消費の新たな発展の可能性を示している。

年配の世代にとっての春節

の楽しみは、春節を祝う文字を書いた「対聯」を貼り、餃子を食べ、爆竹を鳴らすことだ。2000年以降に生まれた世代にとっては、地域の年越しフェスティバルに行き、ネットで正月用品を購入し、クラウドで年始のあいさつをし、電子「紅包」（お年玉―訳者註）を送り、電子決済アプリのラッキーカードで運試しをすることだ。さらに美しい漢服も春節の勝負服として多くの若者に選ばれるようになった。春節の祝い方は世代ごとに異なり、年々多様化し、充実しているが、新しいか古

いかに関係なく、それらすべての根底にあるのは中国人が代々新年に託してきた普遍的な感情、即ち、家族団欒、希望そして新生を待つ心であり、それこそが無形文化遺産である。

『河南日報』2025年1月8日



◆令和6年度第10回理事会の議題（1月16日開催）

今月は下記内容で審議を行った。

●確認事項

12月19日に開催された第9回理事会の議事録案が確認された。

●協議事項

①講演委員会と広報委員会が主となってワーキンググループを立ち上げ、「公開講演会のYouTubeへのUPと協会ホームページの改定」に取り組むこととした。

②委員会、諮問会の在り方について引き続き意見交換を行い、順次改正して行くこととした。

●報告事項
事務局報告

①5月の総会資料作成に向け、各委員会は来年度の事業計画、予算を事務局あてに提出願いたい。

②平成10年に当協会が拓殖大学に寄贈した約2500点の資料は、「国際善隣文庫」として保管されており、閲覧希望の会員は協会の在籍証明書があれば閲覧できる。希望者は事務局まで連絡願いたい。（事務局長 竹前栄男）

会員だより

◎新会員

〈正会員〉

西尾大次郎氏

同好会だより

〈俳句会〉馬場由紀子先生

毎月第2水曜日午後1時から、オンライン（ズーム）での俳句会を開催。初心者も大歓迎ですので、興味のある方は事務局までご連絡ください。

〈謡曲会〉松木千俊先生

お稽古は一人ずつの個人指導です。未経験者も大歓迎ですので、興味のある方は事務局までご連絡ください。

〈一石会〉

新春初基会を1月11日（土）11時より開催しました。卒寿の長谷川二朗先輩を含め新メンバーの阿妻申幸会員も参加され、少人数ながら対戦を行い杉山篤氏が優勝。会費の蓄積があるためこれからも無料で飲食込みの例会を開催します。

初心者も（会員指導）歓迎しますので協力会員の方々を含め参加をお待ちします。定例会開催日は毎月第2土曜日11時～16時。参加希望者は開催日前々日（木曜日）までにメールで幹事（瀬崎明 aseken2000@gmail.com）までご連絡ください。

みんなの写真館

石林 （表紙）

2024年12月に中国雲南省の「石林」という世界遺産を訪れた。雲南省イ族自治州に位置する「石林」は世界でも珍しいカルスト地形で、中国では「天下第一の奇観」と言われている。

およそ2億7000万年前に海底が隆起、古生代の石灰岩が長い年月をかけて雨水に浸食され、形成されたものだ。総面積約350km²だが、高さ20～50mの柱状または剣状、キノコ状、塔状の石灰岩の奇岩が林立しており、その名の通りまさに石の林である。世界でも珍しいタワーカルスト地形ということもあり、世界遺産好きの私にとって、大満足だった。（姜晋如）

書画に見える日中交流の精神世界③ （表4）

2024年2月26日から3月1日に中国文化センターで開催された「日中交流の歴史を訪ねて―書画に見える日中交流の精神世界」で紹介された書画を不定期シリーズで掲載しています。

2024年は日中国交回復52年、平和友好条約締結から46年を経過します。日中交流の歴史は長く、遣唐使は250年余の長きに亘り、その後も両国交流は絶え間なく続きました。本展は、信州佐久に300年余続く老舗の酒蔵に収蔵されていた日中ゆかりの書画等を通じて、両国の交流と文化人、政治家などの精神世界を垣間見ながら、日中交流の歴史を再認識し、善隣関係の一層の発展を念じて企画したものです。（中国文化センターHPより）

2025年3月の行事予定

- 6日(木) 14:00 公開 第30回対面&オンライン講演会
「戦後80年の日本と世界」
山口二郎氏(法政大学法学部教授、北海道大学名誉教授)
- 8日(土) 11:00 一石会囲碁例会(於7階談話室)
- 11日(火) 14:00 謡曲会(松木千俊先生お稽古)
- 12日(水) 13:00 俳句会
兼題「卒業」および当季雑詠から5句を投句(2月28日までに)
- 13日(木) 14:00 公開 第31回対面&オンライン講演会
「大阪・関西万博の準備状況について——開催意義と展望」
菅野将史氏(経済産業省 2025年日本国際博覧会国際室長)
- 21日(金) 14:00 公開 第7回【21世紀アジア塾】講演会(講演委員会と共催)
「桜美林大学の創設者・清水安三と中国——大正デモクラシー期の中国論の検証」(仮題)
高井潔司氏(国際ジャーナリスト、中国研究者、北海道大学名誉教授)
- 27日(木) 14:00 公開 第32回対面&オンライン講演会
「日中共同制作『万里の長城』(1991年)の現場で」
大野清司氏(元TBSビジョン〔現TBSスパークル〕プロデューサー・ディレクター)

3月の会議予定

4日(火) 13:00	国際交流委員会	25日(火) 12:00	環境委員会
19日(水) 13:00	理事会(第12回)	26日(水) 13:00	東北委員会
19日(水) 15:30	広報委員会	28日(金) 14:00	講演委員会

※下線は通常日程に変更あり。

【4月最初の講演会予定】

- 3日(木) 14:00 公開 第1回対面&オンライン講演会
「世界の食糧問題とアグリテック」
大石芳裕氏(明治大学名誉教授)
- 10日(木) 14:00 公開 第2回対面&オンライン講演会
「最近の中国情勢と日本および日中科学技術文化センターの役割」
(仮題)
中島俊輔氏(一般社団法人日中科学技術文化センター事務局長、元日中経済協会調査部長)

みんなの 写真館

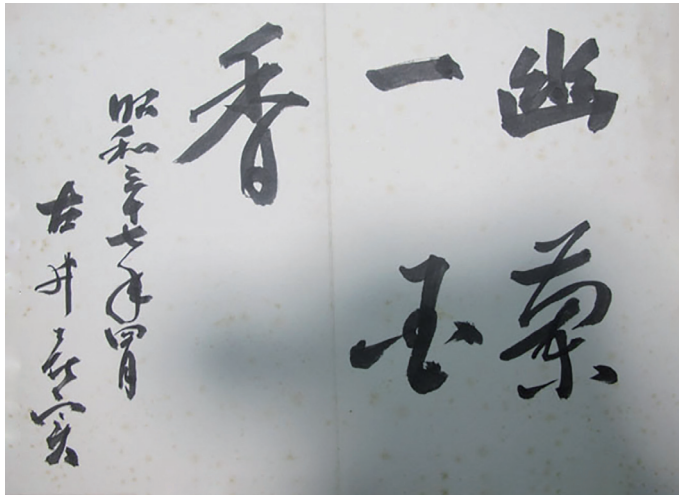
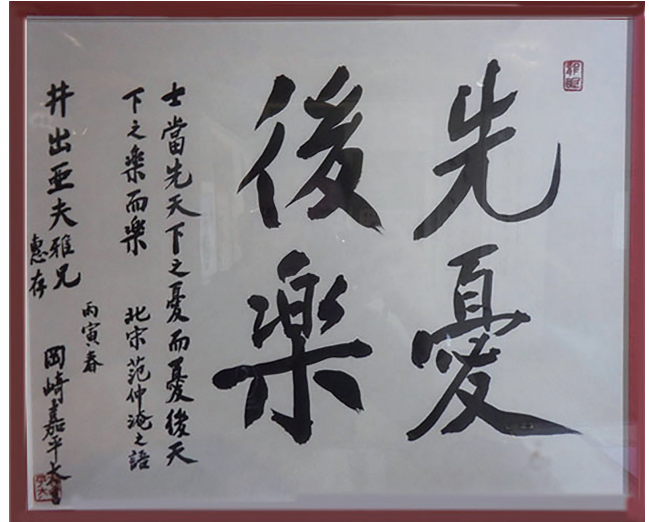
書画に見える日中交流の精神世界③

岡崎 嘉平太（1897～1989年）

1961～67年、全日空第2代社長。高碓達之助一廖承志間の「LT貿易」のあとを受け、「日中覚書貿易」の日本側代表者を1973年まで継続。周恩来との信頼関係を築く。著書に『終りなき日中の旅』（原書房）、『私の記録』（東方書店）など。

「先憂後楽」は北宋・范仲淹（989～1052年）の「岳陽楼記」末尾の一節。

「士当に天下の憂えに先んじて憂え、天下の楽しみに後れて楽しむ」。



古井喜実（1903～1995年）

戦前戦中は内務省官僚。戦後は政治家、松村謙三に伴って中国を訪問して以来、日中友好促進への関心を強め、日中国交正常化に尽力する。

書は「幽蘭一國香」。

田中角栄（1918～1993年）

書画は展示されなかったが国交正常化を実現した訪中時（1972年秋）、周恩来首相と固く握手を交わした。以下は国交正常化時の漢詩。

国交途絶幾星霜（国交途絶して幾星霜）

修好再開秋將到（修好再開秋將に到らんとす）

隣人眼温吾人迎（隣人眼温かにして吾人迎へ）

北京空晴秋氣深（北京空晴れて秋氣深し）

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<https://www.kokusaizenrin.com>